

【卒業生寄稿】

向井 裕樹
ブラジリア大学日本語専攻科長 (UnB)
(1997年度卒業)

ポルトガル語学科の新入生の皆さま、ご入学おめでとうございます。そして、在学生の皆さまにとっても、新たな目標や計画を胸に、期待で溢れている時期ではないでしょうか。私も約 20 年前にエスカダを手にとった時、将来の夢を描きながら読んだことを今でもよく覚えております。

私は現在、ブラジリア大学文学部外国語・翻訳学科日本語専攻科、及び同大学院応用言語学専攻科で教鞭をとっております。当初は、ポルトガル語文法に興味があり、ポルトガル語の研究者になりたいといった夢があったのですが、在学中に地元の国際交流協会でブラジル人に日本語を教え始めたのがきっかけとなり、ブラジルで日本語を教えてみたいと思うようになりました。また、母語を教えながら、「母語を客観的に（メタ言語的に）分析できる能力の有無が外国語習得の成功に通じるのではないか」ということに気が付いたのもこの時期です。そのため、卒業後に渡伯して、サンパウロ大学院日本語専攻科に入学しました。国語学や日本語学をポルトガル語で学ぶといった大変貴重で、かつ苦しかった経験が、今の私の専門知識のベースを築いたといっても過言ではありません。

ブラジルでは、ブラジリア大学、サンパウロ大学、リオデジャネイロ連邦大学をはじめ、8つの大学で日本語・日本文学を専攻することができます。ブラジリア大学は中でも規模が1番大きく、約400名の日本語学習者（主専攻、選択科目としての日本語、公開講座登録者総数）を有しています。ブラジルの首都にこんなに多くの日本語学習者がいるとは想像もしなかったことでしょう。また、2年に1度、南米で一番大きな日本研究国際大会が開かれ、2014年はリオデジャネイロ連邦大学で「第23回日本語・日本文化・日本文学学会」「第10回日本研究国際大会」が開催されました。日本からも堀坂浩太郎先生や三田千代子先生をはじめ、多くの研究者が参加する学会です。

ブラジリア大学は3月が新学期です。私にとって毎年この時期、希望に満ちた新生だけでなく、母校のポルトガル語学科からの留学生も迎え入れることができることを、先輩として何よりも嬉しく感じます。ポルトガル語学習を機に、結果的に今ではその言語を手段として用いて日本語と応用言語学を教えておりますが、約20年前の私には到底想像も付かなかったことです。計画も夢も、自分の成長と選択と共に変わっていくものだと思いますが、チャンスを逃さず、常に自己内省をすることを忘れずに、これからの4年間「自分」を見つける旅に臨んでみてはどうでしょうか。ポルトガル語を出発点に、「あなた」らしい道を描いていってください。